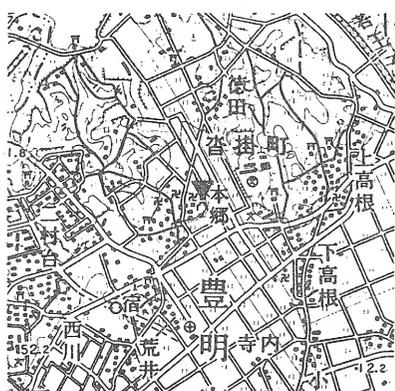


## 愛知・沓掛城跡

- 1 所在地 愛知県豊明市沓掛町東本郷
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)一月〜一九八四年二月
- 3 発掘機関 豊明市沓掛城址発掘調査団
- 4 調査担当者 伊藤秋男・松原隆治・木村光一
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 一五世紀末〜一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

豊明市は名古屋市の南東部に隣接する。城跡は北西から南東に向って水田地帯にのびる低丘陵の先端に立地する。標高は二二m前後



の平城である。  
沓掛城は永祿三年(一五六〇)の桶狭間の戦前夜に今川義元が宿泊したという伝承が残されていることと著名である。本城跡に史跡(豊田)公園整備計画が、市当局に  
の事前調査として四次にわ

たって、本丸跡と考えられる部分を中心に発掘調査が行われた。調査の結果、本丸跡の周囲には土塁が巡り、その内側に礎石建物が、また礎石建物の下層から、土塁・堀等の囲郭遺構を伴わない一種の居館的性格をもつ掘立柱建物をはじめ、井戸状遺構や、南北の二ヶ所から池と推定される遺構群等が検出された。木簡が出土したのはこの遺構群中の北の池(SG〇一)である。木簡の大部分は第三次・四次発掘調査の際、出土した。この池は、東西四m以上、南北四m以上の大きさで、深さは深いところで七〇cmにも達した。池の埋土は黒色の有機質を多量に含むヘドロ状の単一層で、土質や色調などでは分層できなかった。また、埋土中のさまざまなレベルで出土した土器・陶磁器の破片が接合できる場合もあることから、埋土は比較的短期間に堆積したと考えられる。

埋土中からは、後述する木簡のほか、箸・折敷・曲物容器・漆器・しゃもじ・へら・さじ・蓋・桶・下駄・櫛・杭等の木製品が非常に保存の良い状態で出土している。木製品以外に多量に発見された遺物は、地元でつくられた土師器、瀬戸・美濃産あるいは常滑産の鉄釉・灰釉・無釉の皿・碗・鉢・香炉・壺・茶入れ等の陶器、中国製の白磁・染付の皿・碗等の磁器がある。さらに、金属製品として、釘・よろい金具・門金具等、石製品では五輪塔の一部・砥石・硯などがあり、その他、食物残渣と考えられる各種の種子・魚骨・獣骨・鳥骨・貝殻等も出土している。要するに、中世の物質文化の

ほぼ総体が一括して出土したものと考えられる点で、本城跡発見の遺物は考古学的にきわめて重要な意義をもっている。

8 木簡の釈文・内容

- |     |  |           |      |  |         |
|-----|--|-----------|------|--|---------|
| (1) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p>                              | 52×27×5.6 | (8)  | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「天カ」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。文」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p> | 52×28×5 |
| (2) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。ろ」</p>  | 41×21×3   | (9)  | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。工」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。工」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p> | 45×27×5 |
| (3) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。ろ」</p>                               | 48×29×3   | (10) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。工」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。工」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p> | 44×28×5 |
| (4) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。ろ」</p>                               | 48×27×3   | (11) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p>   | 49×29×3 |
| (5) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。ろ」</p>                               | 47×32×3   | (12) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。ね」</p>  | 38×20×2 |
| (6) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。工カ」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。工カ」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。御宮」</p> | 54×26×4   | (13) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。ね」</p> <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p>                             | 52×25×5 |
|     |  |           | (14) | <p>・<sup>(穿孔)</sup>「。花押」</p>   | 54×27×4 |

- (15)  $\left[ \begin{array}{c} \text{〇} \\ \text{〇} \end{array} \right]$  (花押) 56×27×5
- (16)  $\left[ \begin{array}{c} \text{〇} \\ \text{〇} \\ \text{〇} \end{array} \right]$  (字カ) 54×30×5
- (17) × ㄥ × × 144×12×3
- (18)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right]$  (字カ) 144×12×3
- (19) 「の」 (94)×(19)×5
- (20)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right]$  (掛カ) (107)×(40)×5
- (21)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right]$  (花押) (113)×(66)×6
- (22)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right]$  (75)×(25)×3
- (23)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \end{array} \right]$  まごゑもん 144×12×3
- (24)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \end{array} \right]$  あしまごゑもん (49)×16×3
- (25)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right]$  (字カ) (60)×25×3

- (26)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right]$  斗里ふん七升の  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right]$  (定カ) 149×30×10
- りしひ  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right]$  ういれ  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right]$  (候カ) まご太郎 (188)×27×4
- ・∨りしぬし (96)×16×3
- (27) 殿やま 平  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right]$
- (28) 「あごや」 (定カ)  $\left[ \begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right]$

当遺跡から出土した墨書の認められる木簡は以上であり、その形状は短冊形・将棋駒形(1)~(10)等さまざまで、草戸千軒町遺跡の分類にもあてはまらないものが多い。詳細な整理を終えれば、さらに増えることも考えられる。また、墨書が認められなかったが、墨書のあるものと同一の形状をもつ木片も発見されている。例えば五点を数える将棋駒形の木片などは、その例である。樹種については、いずれ分析調査をして、同定したいと考えている。(7)、(8)の「天文十七」、「天文」は、おそらく天文一七年(一五四八)の年号をさすものと考えられる。(28)は糸巻ぎに書かれたものである。

### 9 関係文献

愛知県豊明市沓掛城址発掘調査団『沓掛城址第一次発掘調査報告書』(一九八二年)

同『杏掛城址第二次発掘調査報告書』（一九八三年）  
 同『杏掛城址第三次発掘調査報告書』（一九八四年）  
 同『杏掛城址第四次発掘調査報告書』（一九八五年）

（伊藤秋男・木村光一）

